

ハロウィンホラー短編集

誰にもなれなかった夜

霧夢むう



誰にもなれなかった夜

今日は年に一度の祭りと言うこともあって、街並みは温かく賑わっていた。仮装をする子供たちに、キャンディーやチョコレートを配る大人も浮ついている。そして、少し夜遅くまで騒ぐことを許された子供たちはりんご飴を片手に友達の家を行ったり来たりしていた。ランタンの灯りは子供たちを優しく包み、更に空には大きな月が温かく街並みを見守っていた。どの家も幸せに包まれ、笑い声が絶えない素敵な夜になるはずだった。

「何だってこんなにも月が明るいんだ。畜生が」

刺すように冷たい光を投げかけている月から逃げるように、その男は裏通りへと続く道へ入っていった。年に一度だけと浮かれている町並みも、それに混じることのできない自分も、何もかもが面白くない。無邪気に道行く子供を何度か蹴とぼしたくなかったが、ぐっと堪えて、代わりにごみ箱を蹴とぼした。その上で眠っていた黒猫がヴァンと鳴いて暗がりには逃げて行った。後ろめたい気持ちがないといえば嘘になるが、それ以上に全てをめっちゃめっちゃにしたい仕方がない。

ガラ ガラ ガラガラ

男は黒猫が逃げて行った先にあった鉄パイプを拾いあげた。人の背丈の半分くらいの長さのそれは錆が浮いていて、男の手に妙に馴染んだ。

そうだ、壊せばいい。

全てを壊せば、憎らしい明日が来ることもない。なに不自由ない幸せな家族を見ることもない。ないない尽くしのいいことだらけだ。

カンカンカラカラカラカラカラ

目指すは人通りの多い中心街の広場だ。ちょうど、祭りに合わせて浮かれた子供たちが集まっているだろう。全てが満ち足りた、そしてこれからもそれが約束されているかのような明るい表情を浮かべているに違いない。それを、これから打ち砕きに行くのだ。とても愉快なことだ。どうせ、もう失うものなど何一つないのだ。

生まれた時から親など居ていないようなものだったし、現に今ではどこで何をしているのかもわからない。友達もいることにはいたが、先日金を貸したまま行方をくらませてしまった。噂ではよくない仲間からよくない借金をして、更に別のよくないところから重ねて多額の借金をしてきたそうだ。そうでなくても、普段から信用の足りない人物であった。貸した金が返ってくることはないだろう。恋人と呼ばれる存在もいたことはあったが、ただでさえ少ない財産をむしり取られるばかりだった。

更に数ヶ月前に仕事も失って貯金も底を尽き、月末にあたる今日、ついに家財道具一切を取り

上げられて住んでいるところから追い出されてしまった。先の友人と同じく自称「親友」たちはとっくの昔に全て音信不通だ。政府の弱者に救済を求める機関ですら、とりあえず健康でまだ若いといわれる年齢の男では、相手にしてくれない。教会へ行くことも考えたが、他人からの施しで生きていくまで落ちぶれたつもりはなかったし、それを恥と思わない連中と一緒にはいられないと思っていた。

これだけのことがあるのだ。生まれてから少なくとも真っ当に生きていく努力はしてきたつもりだ。救いだって十分求めてきた。金がない、愛がない、寂しい、誰か一緒にいてくれ。そういう言葉は全て温かい窓の向こうに吸収されて、そのまま男に返ってくることはなかった。社会が個人を痛めつけるなら、社会が個人のために報いを受けることがあったっていいではないか。

カラカラカラカラカカカカ

鉄パイプが地面とぶつかる金属の音が心地よい。さてどうやって「幸せ」を壊してやろうか、ということで男の心はいっぱいだった。まず脳天に鉄パイプを振り下ろすのか、それとも柔らかい体を真っ二つにしてやろうか、それとも火の入った暖炉から真っ赤な墨をかき出してあちこちにまき散らしてやろうか。

ガラガラドガッ

道端のゴミ箱を試しに鉄パイプで殴ってみた。金属製のゴミ箱は無残にも真ん中を凹ませて路地の向こう側に転がっていった。

「これはいいな」

ゴミ箱を殴った瞬間、それまで腹の底から尽きることなく湧きあがっていたどす黒い感情が一気に消えるのを男は感じた。愉快だった。ただのゴミ箱ですらこれほどに愉快なのだ。まして「幸せ」を凹ませたらどんなに笑いが止まらないのだろうか。ただ今は、腹の底から大笑いしたかった。

幸せそうな子供の脳天をかち割って、派手に新聞に載ってやろう。そして悲劇の主人公になったクソガキの親に裁判所で悪態をついて、社会への恨みつらみを全部聞いてもらおう。世間の同情は豊かな生活をしている奴らではなく、恵まれなかったばかりに暴拳を働いた殺戮者へ向けられるだろう。そうなれば、もっと大笑いができるかもしれない。これは社会全体の罪であり、その報いなのだから。

——きゃはははははははは

「早速試してみるか」

聞こえてきた子供の笑い声に、嗜虐心が更にめらめらと燃え上がる。こんなゴミだらけの薄汚

い路地裏に子供がいるのもおかしいが、今日は年に一度の祭りだ。何か変わったことがあってもおかしくはない。

—ねえ、聞こえてるみたい

—おもしろーい、あはははははは

声のする方へ歩いていくが、子供の姿は見当たらない。それどころか、いつの間にか人通りの全くない工場の立ち並ぶ地域までやってきてしまった。資材搬入口の立ち入り禁止のロープを乗り越え、施設から施設へオイルを運ぶパイプの下をくぐったが、子供の姿は見当たらない。

—どうしよう、ついてきちゃった

—じゃあ、仲間にしちゃおっか？

流石に何かがおかしいことに男は気がついた。はっきりと声は聞こえるのに、申し訳程度の外灯の光に子供たちの姿も影も照らし出されていない。それに、聞こえるのは声ばかりで足音やその他の音は全く聞こえない。

(これは、どういうことだろう)

瞬間、心臓が縮み上がった。

いったい、自分は何て馬鹿な考えをしていたのか。どうして鉄パイプなんて握っているのか。どうして子供の声はするのに姿が全く見えないのか。急に背中に冷たい汗が浮かんでくるのを感じた。ぞわぞわと虫のような感覚が足元から這い上がってくる。

—ああ、気がついたみたいだよ

—つまんなーい

—でも、もう遅いよ

声は確かに、男の耳元ではっきりと聞こえた。だけど、その声の主はどこにも見当たらなかった。

—ねえ、一体誰と遊んでいるの？

「うわあああああ！」

それに気が付いてしまった男は大声で叫んだ。怖くて、怖くて、たまらない。先ほどまでの愉快的な気持ちは全て吹き飛んでしまった。全身の毛が逆立ち、手足が小刻みに震え始める。何が起きているかわからないのが、とても怖い。

「あああああ、にげ、ああああ」

逃げないと、と男は呟いたつもりだった。しかし、まともな言葉にはならなかった。腰が砕け

たようにガクガクと震え、思ったように足が動かない。薄暗い光の中で、たった数秒のことも永遠に続くように感じられた。

ガラガランッ

やっとのことで鉄パイプを放り出して、男は来た道を全力で走って引き返し始めた。誰でもいい、他の人間が見たかった。幻聴だとしても、勘違いだとしても、怖いものは怖い。一瞬たりとも、この場所にはいたくない。

——きゃはははは！！！！

まだ耳元ではあの声が聞こえている。まるで頭に張り付いているように、たくさんの声が聞こえてくる。

「ついて、くるな！」

走りながら頭を振るが、声はどこまでもついてきた。

——あはははははは

——あーはっはっはっはっは

声は遠ざかるどころか、ぴったりと後頭部に張り付いているように鳴り響いていた。

——馬鹿みたい、あははははは

——ホント人間って馬鹿だね

どこを、どのように走ったのかわからない。ただどこまで逃げても声は追いかけてくるし、その数はどんどん増えているようだった。

——ほんとだ、うふふふふふ

——ひひひひひ、腹痛いよー

最初は二、三人ほどの声だったのが、今ではまるで学校の昼休みにおもちゃ箱をひっくり返したような騒がしさに変わっていた。耳障りな笑い声に混ざって、ドンドンと何かを叩く音やギィギィと何かをひっかく音も聞こえる。

——げひゃひゃひゃ

——ほんとだあー

——ぎやははははっ

「くるな！　くるな！　くるなあ！」

耳をふさいでも、音の塊は耳の中に入ってくる。呼吸も苦しくなっているはずだが、そんなことを気にする余裕はない。既に足の感覚もなくなっているが、とにかくこの奇妙な音から逃れたい一心で、男は足を前に出し続けていた。

「だれか！　だれかあ！」

男は声にならない声で助けを求めた。ところで、助けを求めたところで誰が助けてくれると言うのだろうか？

急に男の意識は自分を見下ろす視点にやってきた。身体は心臓に突き刺さった恐怖のみで動いているが、頭がすうっと冴え始めたのだ。何故こんなことになったのか、声の塊の正体は何なのか。不可解なことを思い出せば思い出すほど、最初にまともではなかったのが己であったことを痛感した。

（一体、いつから俺はおかしくなったのだろうか？）

何故子供を殺したいと思ったのか。どうして傷をつけるのが愉快でたまらなかったのか。それらは正常な心理だったのだろうか。もちろん何かを傷つけないと思うことは常識で考えれば正常ではない。既に鉄パイプを拾い上げたときから、男はこの奇妙な空間に捉われていたのだ。それに、逃げ切れたとしてこのことをどうやって説明すればいいのだろうか。子供の声の化け物に追いかけられた、と言って一体誰が信じるのだろうか。いずれにしても、いい意味でも悪い意味でも檻の向こうの生活が待っているだけだ。

（なんだ、俺はもうおかしかったのか）

目の前の狂気を受け入れたとき、笑い声が止んだ。その代わりに、ぐにやりという心臓が潰れる音が聞こえた気がした。

どのくらいの時間が経ったのだろうか。気が付けば、声はすっかり聞こえなくなっていた。ただ真っ暗で、何も見えない。手探りで男は立ちあがった。

「助かった……？」

ひどく寒気がする。早くどこかへ行行って、体を落ち着けたい。ぐらぐらと揺れる頭を抱えて、男は歩き出した。

「どこか……明るいところへ……」

次第に明るくなる視界を頼りに、薄暗い工場の群れから脱出を試みる。デタラメに走り回ったせいで、どこにいるのか見当がつかない。それでも歩いているうちに人通りのある道にたどり着くだろうと思いながら、男は歩き続けた。

やがて男がたどり着いたのは人通りとは反対の倉庫街だった。無機質な倉庫の群れと、山積みされたコンテナが壁のようにそそり立っている。この壁の向こうは港だ。空の様子から、夜の終わりも見えた。もうじき、朝日も拝めるだろう。

「少し、休まないと」

ただぼんやりとした感覚のみがあるばかりで、まったく体の感覚がない。歩いていても、足の感覚がはっきりと感じられず、恐怖で痺れた体がなかなか回復しない。男は港のそばに鍵の開いている錆びたコンテナを見つけ、そこに潜り込んだ。とにかく、屋根のある場所で横になりたかった。

「あれ、お客さんは珍しいな」

コンテナの奥には先客がいた。仮装パーティの帰りなのか、頭からマントをかぶり、おかしい仮面をかぶっている子供だった。

「お前は誰だ」

時刻は朝日が昇る前だ。子供が一人でいるのはおかしいが、今夜は特別な日だったはずだ。夜更かしをして、かくれんぼでもしているのかもしれない。

「誰？ そんなことをいうのは人間だけだよ」

子供は声を出して笑った。

「当たり前だ、俺は人間だ。お前も」

男はそのとき、子供のずれた仮面の下に気がついた。

仮面の下には、闇が広がるばかりだった。

——自分が誰かを気にするのは人間だけだよ

子供の声は、夕べ頭に張り付いた子供の声と同質に聞こえた。

——あー、キミ気がついていないんだね

男は自分の手のひらを見た。

手のひらはなかった。

頭に手を回すと、あるべき場所には半分もソレはなかった。

足はついていたが、血だらけだった。

胴体はところどころ穴が空いていた。

——ずいぶんと素敵な姿じゃないか

「ち、違う……」

男は首を横に振ろうとしたが、ぐらぐらとするばかりでうまく動かすことができなかった。

——何が違うのさ

子供はクスクスと笑いながら立ちあがった。

——ここにいたいなら居てもいいよ

——僕が、別の場所に行くから

「待て、俺は」

——結構この場所気に入ってたんだけどさ

——僕らはね、ひとつの場所にひとりしか居られないんだ

ぎこちなく何かの行動をとろうとする男の脇を、子供はするりと通り抜けた。

——お祭りの夜だけだよ、出歩けるのは

クスクスと笑う「子供」の声が遠くなり、やがて聞こえなくなった。そしてひとりでにコンテナの扉が閉まると、また闇が広がった。男は何とか扉に寄って開けようとしたが、びくとも動かない。そもそも開ける手がなかった。

この箱から出る方法はただひとつ。

祭りの夜に、また自分のような愚か者がやってくるのを待つしかなさそうだ。死ぬことも逃げることも、もうできないのだから。

祭りが終わった明け方の町並みは、深夜に郊外の工場で積み上げられた廃材に突っ込んで下敷きになった哀れな男の話題でもちきりであった。

役立たずの影

「邪魔よ、さっさと出かけておいで」

また母さんが怒鳴った。僕は椅子からのろのろ立ち上がると上着を手を取った。

「もっと速くしなさい、この役立たず」

そして叩き出されるように家から追い出された。冬になる前の風が冷たく吹き渡り、僕の心を更に冷たくした。

遠い昔にはみんなに名前と呼ばれていた時期もあったのかもしれない。だけど、今は誰も名前でも僕のことを呼ばない。家に帰ればこの出来損ないの穀潰しと叩かれるし、学校に行けば役立たずのどてかぼちゃと囃される。確かに僕はトロいし、頭だってそんなによくはないかもしれない。父さんや母さんは僕なんかより出来のいい兄さんばかり可愛がるし、学校でも僕のために何かをしてくれる人なんていない。親切にされたことがないのに、誰かに親切にできるはずがない。いつも隅の方でぼうっとしているだけだ。

そういうわけで何をやっても叱られるか、笑われるだけだった。だからと言って何もしないでいると、今日のように叩かれて家から追い出される。行くあてもないけど、家に帰ればまた怒鳴られるのはわかっていた。今夜は兄さんの友達がパーティーを開くからどこかへ行っていてくれ、ということだ。家のそばにいても惨めになるだけなので、学校の裏庭にやってきた。ここに隠れていれば、誰にも見つからないで惨めになることもない。もし他の子に見つければ石をぶつけられるし、他の大人に会いたくもなかった。ここで地面に絵を描いて時間をつぶすのが、僕のささやかな楽しみだ。

——ねえ君、毎日が嫌にならない？

背後から声がした気がした。でも、それは気のせいだった。僕の後ろは風が通り抜けるばかりだ。そもそも、僕に好き好んで声をかける奴なんていない。今日は年に一度のお祭りだ。僕以外の子供はみんなカボチャをくりぬいてお面を作ったり、パーティーで遊ぶおもちゃを準備しているところだ。何もやってないのは僕だけで、他の子は楽しく笑っている。あまりにも寂しくてついに僕は頭がいかれてしまったのだろうか。

「そりゃ、嫌だよ。痛いし怖いし」

どうせ誰も見ていないので、僕は幻聴に返事をした。本当は僕だって、何か楽しいことをしたい。父さんと母さんと兄さんと食事をしたいし、友達と一緒に遊んでみたい。

——痛いのは嫌？ 怖いのも嫌？

また幻聴だ。男の声とも女の声ともわからない、ただ意味だけがわかる不思議な声。

「当たり前だよ。嫌に決まってる」

それっきり声は聞こえなくなった。やっぱり僕がおかしくなっていたのかもしれない。僕は地面に大きなお化けの絵を描いた。僕に話しかけてきたのはこのお化けで、お化けは人間のことを見かけると頭からバリバリと食べてしまう。僕はさっきお化けに見つかって、本当はもう食べられてしまった後なのだ。お化けには角があって目が光っていて大きな鉤爪があって、そして空を飛ぶコウモリの羽根がある。なんて気持ち悪い姿をしているのだろう。まるで、僕みたいだ。僕は地面のお化けを足で消した。こんな気持ち悪いもの、消えてしまった方がいいんだ。そしてまた靴を泥だらけにして、母さんに叱られる。

もうすっかり日の暮れた道を僕はとぼとぼと歩いていた。遠くで小さい子供たちが笑う声が聞こえてくる。もう祭りは始まっているようだ。

「あっ、見ろよ。カボチャが歩いてるぜ」

「本当だ！」

「いい音鳴らせ！」

子供たちはお祭りの衣装を着て、僕に石を投げつけてきた。まだ小さな子供だからほとんどが当たらない。僕は急いでその場を通り過ぎた。石をぶつけられるのは慣れっこだけど、やっぱり当たると痛い。

すっかり日が沈んで、家々の灯りだけがぼつりぼつりと見える。いつもは暗くなれば家に入れてもらえるけれど、今日は兄さんの友達がたくさん来ているから、中に入れてもらえない。家の裏で兄さんの友達が帰るのをずっと待っているしかない。昼に家を追い出される前に食事をしただけなので、腹も随分と減っている。少しでも暖かさを求めて灯りの漏れる窓の下にやってきて屈んだけれど、中から聞こえる楽しそうな笑い声とごちそうの匂いで、余計に冷たい夜風が骨身にしみた。

一体、僕が何をしたって言うんだ。僕は僕であるだけなのに、どうしてこんなことになっているんだ。

「誰も僕を知らないところに行けたらいいのに」

流れてくる鼻水をすすって、今度こそ僕は独り言を言った。誰も僕を知らなければ、僕はただのかわいそうな子供だ。よくわからないけれど、きっとそうに違いない。

——本当に？

また先ほどの幻聴が聞こえてきた。

「ああ嫌だね、こんな人生終わってしまったもいいんだ」

こんなに嫌われているんだ、いつそまともな考えは捨てておかしい人間になったほうが楽なのかもしれない。

——じゃあ交換しようよ。

「何を？」

——ボクと君。いいでしょう？

家の中から大きな笑い声が聞こえた。兄さんが友達とゲームをしているらしい。僕はそれがどんな遊びなのか知らない。

「それってどういうこと？」

僕は少し嬉しくなった。妄想の友達でも、こんな風に誰かと話をするのは久しぶりだった。

——交換は交換だよ。それだけさ。

また家の中から笑い声が聞こえてきた。僕も負けないように返事をする。

「ふうん。ところで君は誰なんだい？」

——ボクはボクさ。誰でもないよ。

声も嬉しそうに答えるが、相変わらずどこから声ができるのかわからない。

「交換すると何かいいことあるの？」

——ボクが君の代わりに痛みを受けてあげる。

「本当に？ 僕はどうなるんだい？」

——ボクは痛みも怖さも感じないんだ。

僕は窓から家の中を覗いた。兄さんが笑っていて、僕の知らない友達がたくさんいた。そのわきで母さんがにこにこことケーキを切っている。僕の食べたことのないケーキ。一生食べることのできないケーキ。僕の気持ちは決まっていた。

「それなら、君になってもいいよ」

声は返事をしなかった。でも、かすかに何か震えるような感じがした。

「ところで、君は僕になって何が楽しいの？」

僕は家の中を見ないように壁に座り込んだ。

——知らないの？ 誰かに傷つけられるのは、とっても楽しいんだよ。

声は今度ははっきりと聞こえた。その声は知っているようで、まったく聞いたことのない声だった。くぐもった声ははっきりと音になって、ケタケタという笑い声に変わった。それまでの消えそうな曖昧な声ではない。ひどく下品な、いやらしい笑い声。その笑い声を聞いているうちに、僕はすうっと意識が遠のくのを感じた。

一瞬だけ、夢を見ていたようだ。とても暗くて冷たいところに閉じ込められて、一生出られない夢。どれだけ叫んでも喚いても誰もやって来ないし、助けてもらえない。どんどん体が凍りついて、寒さや痛みや悲しみも何も感じない、死ぬまでこのままなんだと諦めたとき、僕の意識は家の裏に戻ってきていた。がくがくと震える感覚が引いていくと、僕はまた窓の外に座り込んでいた。いや、まだ夢を見ているのかもしれない。

だって、目の前に僕がいるのだから。

「しかしボクは本当に醜いね、眼なんかぎよろぎよろだし、鼻は丸くて豚みたいだし、おまけに太ってるときた」

——き、君は一体誰なんだ！？

僕は精一杯声を張り上げたつもりだったけれど、僕の声は声にならなかった。声だけでなく、手も足も見えなくなっていた。座り込んでいるつもりだったけれど、僕は地べたにぺったりと這いつくばっていて、窓の外に座り込んでいるボクを見上げていた。

「望みどおり、君は『誰でもない何か』になったんだよ、おめでとう」

目の前のボクはニタニタとおぞましい笑みを浮かべた。こいつは僕じゃない、さっきまで僕と話していた僕以外の『何か』なんだ。

「『何か』は死なない。誰にも見えないし聞こえない。君みたいに『何か』になりたがってる人を見つける以外はね」

僕は力いっぱい『何か』に乗っ取られたボクに向かって掴みかかったつもりだったけれど、ただ風のように空気が揺れるだけだった。そんな僕の様子を知ってか知らずか、ボクは大声でゲタゲタと笑い転げた。太っていて醜くて、ひどく汚らしい生き物。これが僕だったなんて、僕は考えたくもない。

——ぼ、僕はこんなことを望んだわけじゃないぞ！

力の限り叫んだつもりだったが、無駄だった。僕の声も体も影になってしまっていて、地面から離れることが出来ない。

「君みたいなグズじゃないから、ボクはもっとうまく生きていくけどね。じゃあさようなら、役立たずさん」

――待て！

手を伸ばしたつもりだったが、何も掴めなかった。ボクは立ちあがると、まだパーティーをやっている家に入って行ってしまった。たちまち家の中から悲鳴が聞こえ、ボクが家から放り出されるのが見えた。ボクは殴られた跡があるのにゲタゲタと笑っていて、その口と手には白いクリームがべったりついていた。

――こいつは僕じゃない！ 偽物だ！

家に向かって僕は叫んだけれど、それも夜風にかき消されてしまった。僕はその後何もすることができず、兄さんの友達が帰った後にボクが家に入れてもらえるまでずっとその場にいることしかできなかった。僕でなくなったボクは、僕が掴めなかった何かをしっかりと捕まえてしまったようだ。



あれから僕は誰にもいじめられなくなった。お腹もすかないし寒くもないから、もちろん痛みも感じない。でも、僕は僕であることが証明できなくなってしまった。ここに確かにいるのに、誰も僕に気がつかない。影になった僕は様々な方法で僕がここにいることを伝えようとしたけれど、全ては徒労に終わった。

ボクは相変わらずのろまで鈍くさくて虐げられているけれど、いじめられるその度に下品にゲタゲタと大笑いをする。周りは急にボクがおかしくなってしまったと思っているらしいけれど、ボクの様子が変わったことを心配する人はいなかった。誰も僕がボクになったことに気がついていない。

「ジャック！ 本当にお前はどうしようもない奴だな！」

今日もボクがヘマをして先生に怒られていた。ボクはまたゲタゲタと笑っていた。学校の帰り道で石をぶつけられる度に、ボクはやはり笑っていた。急に笑うようになったボクを子供たちは囃したてた。でも、それは僕を囃したてていたときの声とは違っていた。ボクは以前の僕ではない。あんな声は僕には出せない。

こうやってボクを見つめていても、全てはもう僕に関係のないことだった。散々役立たずと罵ら

れた僕が本当の役立たずになったのに、自分から消えることもできない。

やっぱり僕は、本当にいない子だったんだ。

首なし地蔵とあんころもち

よーつとよつと　こさえとけ
あんころもちをお　こさえとけ
こめのめしこをくいたけりゃ
あんころもちをわすれるな
くびかりおきぬがやってきて
たちまちくびをちょんぎるぞ
よーつとよつと　こさえとけ
うしろのかずらはまだならぬ

ある村には変わった風習がありました。稲の収穫が終わったに行われる祭りで、必ず村のはずれの六地蔵の前にあんころもちを供えるというものです。そのお地蔵様も奇妙なもので、すべて最初から首がありません。その地蔵には、こんな言い伝えがあるとされています。



昔むかし、村のはずれにキツネ憑きの男と目が見えない女が住んでいました。村の者は二人を哀れがって、何かと村の中で暮らしていけるよう世話をしていました。男と女は一人の娘をもうけていましたが、娘は器量が大変悪く、村の者は大変気味悪がっていました。ある日、男が山へ出かけたきり戻ってこなくなり、それからは女と娘の二人でやっとのことで暮らしていました。

その村では稲刈りが終わると、今年の実りを感謝する収穫祭を行っていました。黄金色に実った田んぼからすっかり稲を刈り取ると、その稲を山の祠に供えに行きます。その後、一日をかけて今年の稲作りをねぎらう宴を開きます。大人は酒を飲んで歌って踊り、子供たちにはこの祭りのためにとっておいた小豆を煮込んで餅をつき、あんころもちを拵えます。お餅はこの収穫祭と正月にしか食べられないごちそうだったので、村の子供たちはこの祭りを楽しみにしていました。男たちが餅をつき、女たちが小豆を煮る匂いが村に満ちるとき、村は静かな冬に向かっていくのが毎年のごとくでした。

ところが、その年は普段は滅多に里に下りてこない村はずれの娘が、にぎやかな宴に誘われてやってきました。母親も村の者に迷惑をかけたくないと思っていたので、娘には祭りのことを教えたことはありませんでした。年に一度聞こえてくる楽しそうな声を娘は不思議がっていました。娘も「行ってはならない」という母親の言いつけを守っていたのですが、今年は風邪で母親が寝込んだために夕方になってからこっそりと下りてきたのです。

娘は大人たちが顔を赤くして歌を歌っていたり、そろって踊っているのを遠くから見ていました

。初めて見る祭りの様子に娘の心は躍ります。やがて娘は大人たちの輪から離れたところで子供たちが集まっているのを見つけました。大人の食べているものと違って、子供たちは黒くて丸い塊を分け合っていました。それはとてもいい匂いがして、たいそうおいしそうに見えました。

「おらも食いてえ」

娘は子供たちに話しかけました。子供たちはいきなり現れた娘を見てぎよっとしました。それほど娘の顔はひどく醜かったのです。

「おめえ、誰だ？」

年長の子供がおそろおそろ尋ねました。子供たちは娘の存在は聞いていたのですが、実際に目にするのは初めてだったのです。

「おらも、食いてえ」

娘は質問の意図が分からず、ただあんころもちを分けてほしいということを伝えようとしていました。年下の子は怯えて、年長の子の陰に隠れます。

「こいつ、村はずれの家の娘だ！」

誰かが叫びました。あそこの家の子には関わっちゃなんねえぞ、と大人たちに日々聞かされていた子供たちは怯え、どよめきました。

「寄るな化け物！」

とっさにひとりの子が石を拾って娘にぶつけました。突然のことに驚いて、娘はその場に倒れました。

「おら、化け物でねえよ……」

それを皮切りに子供たちは手に手に石や土塊を拾って、娘に投げつけました。

「ウソこくでねえ」

「おめえは泥団子でも食ってろ！」

子供たちは娘を追い出そうと必死になりました。娘がひどく醜かったこともありますが、子供たちにとってはあんころもちの分け前が見知らぬ者によって減ることも大変恐ろしいことだったのです。

「なして、なしてもらえねんだ？」

「食えんもんは食えん！」

「とつとと帰れ化け物！」

娘はやつとのことで起き上がると、ほうほうのていで泣きながら家に帰りました。

「おっかあ！ なしておらはもらえねんだ？」

娘の母親はたいそう驚いて、娘の話を聞きました。そして子供たちが食べていたのはあんころもちというもので、一年間野良作業を頑張ったご褒美だということを教えました。

「さあ、お祭りの夜だから泣くのはよせよせ」

娘の母親は娘が醜いということは聞いていましたが、実際に顔を見たことがないのでたいそう娘をかわいがっていました。やがて泣きつかれた娘は、遠くから聞こえる村人たちの楽しそうな笑い声を聞きながら寝入ってしまいました。

翌朝、娘は山の中にある池まで来ました。あんころもちが食べられないことはなんとなくわかったのですが、石をぶつけられて化け物と罵られたことがよく理解できなかつたのです。村のそばにある浅い川では顔をよく映すことができなかつたので、娘は実際に自分の顔をまじまじと見たことがなかつたのです。

「おらはそんなに化け物みたいなのか？」

澄んだ水面に映った顔は、娘が今まで見たことのある人間とは違う顔をした生き物でした。確かに目はふたつあり、鼻はひとつで口もひとつなのですが、そのふたつの目の間はひどく離れていて、鼻は大きく上に沿っていました。更に口もひどく大きく、まるで頬が裂けたように顔にべったりと張り付いているのです。娘は己の目を疑いました。こんなにひどい怪物が、自分であると言うのが信じられなかつたのです。片目を瞑ってみると、水面の怪物も片目を瞑ってみせます。大きく口を開けてみると、水面の怪物もまた大きく口を開いてみせます。更に目の前で手をぱちんと合わせてみると、水面の怪物もぱちんと手を合わせ、水面に波が立ち、それがぐにゃぐにゃと水面の怪物の顔を余計に気持ちの悪いものにさせました。

「この化け物が……」

娘は昨夜のことを思い出しました。こんなに気持ちの悪い顔の子供がいきなり現れたら、誰でもびっくりしてしまうだろう。娘は、村の大人たちが自分を疎むのは、目の見えない母親の子だからだとばかり思っていたのです。たまに家に来て母親の世話をしてくれる姐さんたちも母親には親切にするのに、なるべく自分のことを見ないようにしていたのは、境遇のせいではなかつたのだと娘は確信しました。そして、これからこの顔でどうやって生きていけばいいのか考えました。

「もし、おっかあの目が見えたらなあ」

娘はぼつりと呟きました。

「もし、おっとうが生きてたらなあ」

今は何とか村人たちの厚意で母親が生きていて、その情けで自分も生かされていると言うことを娘は知っていました。けれど、もし父親のように母親が帰って来ないということがあれば、自分はどうしたらいいのだろう。娘は池の前でしばらく己の姿を見つめ、考え続けました。

それからしばらくして、池の鏡のような水面に大きな波が立ちましたが、それを見ている者は誰もいませんでした。

そして、いつまで経っても娘が帰ってこないと騒いだ母親が村人に頼み、山を探してもらいました。すぐに娘の帯だけが池に浮いているのが見つかりましたが、肝心の娘はどうとう見つかりませんでした。それを聞いた母親はあまりにも悲しんで狂ったように泣きわめき、やがて弱ってすぐ後を追うように亡くなりました。

母親の埋葬が終わると、しばらくは後味の悪い雰囲気が村に漂っていましたが、半ば厄介者だった親子がいなくなったことによってせいせいしたということもあり、すぐにいつもの村に戻りま

した。

月日が流れてその年の冬が終わり、春が来てまた収穫の季節になりました。収穫も無事に終わり、落ちるのが早い夕日に急かされるように行われる餅つきの際に、その声は子供たちだけに聞こえてきました。

『おらも、あんころもち喰いてえ』

餅がつきあがるのを待っていた子供たちは驚きました。

「今、誰か何か言ったか？」

その場にいた子供たちは全員首を振りました。どこかで聞いたことのあるような声でしたが、それが何なのか子供たちは思い出せませんでした。まだ去年のことを思い出すこともなく、子供たちはただあんころもちが出来上がるのを待っているだけです。

『なしてあんころもちもらえねんだ？』

今度は、はっきりと声だけが聞こえてきました。風の仕業ではなく、それは確かに子供たちに語りかけていました。先ほどまで吹いていた風が止み、急に辺りがしんと静まり返りました。

『おらも、あんころもち喰いてえ』

『おらも、あんころもち喰いてえ』

『おらも、あんころもち食いてえ』

見えない声の主は子供たちの周りをぐるぐる回りながら、何度も語りかけました。去年の娘が化けて出たのだ、と子供たちは察しました。

「き、きつねの仕業に決まってる！」

年長の子供が声を上げました。

「そ、それにお、おめえみたいな化け物に食わせるあんころもちはねえ！」

震える声で子供たちは口々に答えました。

「そうだ、化け物は帰れ！」

「おめえなんか、怖くねえぞ！」

「きつねはアブラゲでも喰ってろ！」

『じゃあ、あんころもちはいらねえ……』

声はだんだん弱くなり、風と一緒に消えていきました。子供たちはほっと胸を撫で下ろしましたが、急に強い風が吹いてきて、先ほどの声ははっきりと、大きく聞こえました。

『そのかわりに、新しい顔をおくれ!』

子供たちの鋭い悲鳴に驚いた大人たちが駆けつけましたが、あまりのことに大人たちも動揺しました。年長の子の首がない死体が転がり、血しぶきを浴びた年下の子供たちが大声で泣き叫んでいたのです。子供の親はひっくり返って気絶し、他の大人たちも顔を青くしました。どこを探しても子供の首は見つからず、首の断面はまるでよく研いだ刃物で切った餅のようになめらかで、それが獣や並の人間の仕業でないことは明らかでした。子供たちから話を聞いた村の人々は姿の见えない怪物に恐れおののきました。

この声だけの怪物はその次の年も、更にその次の年も現れました。決まってあんころもちを要求し、子供たちが怯えているとそのうちの一人の首を切り取っていくのです。祭りを取りやめても、決まって収穫の後の時期に死んだ娘と同じ年頃の子供の首が亡くなっていきました。今年は誰が貰われていくのかと子供のいる親は農作業も手につかず、すっかり村に活気がなくなりました。

とうとう五人の子供の首がなくなったころ、話を聞いた旅の坊さんがやってきて、娘の供養のために地蔵を立ててくださいました。娘と、死んだ子供たち合わせて六体の地蔵が村人の協力で村の入り口に置かれました。

「どうか、あの世で腹一杯喰ってください」

たくさんのおあんころもちを地蔵に供え、旅の坊さんはねんごろにありがたいお経も読んでくれました。それから子供の首がなくなるということはぱったりなくなりました。

ところが、この地蔵の首は収穫祭が終わった後、必ず刃物で切り取ったようになっていくのです。いくら直しても首だけなくなるのでいつの間にか首を置くのをやめてしまいました。それからは、収穫祭の後にお供えするあんころもちがきれいになること以外、特に変わったことは起きなくなったそうです。



後世の人はこの名前の伝わっていない娘を「くびかりおきぬ」と呼び、子供が他の子供をいじめると「くびかりおきぬがやってくるぞ」と叱りました。今日も首なし地蔵の前を通る母子連れは、決まって子供にこう言います。

「人様の見た目を悪く言ったり、意地悪して仲間に入れたいなんていうことをするもんじゃないよ。そんな子のところにはくびかりおきぬがやってきて、お前の首をちょん切ってしまうからね。さあ、今日はお彼岸の入りだから、お墓参りをして家に帰ってから、たっぷりおはぎ

を食べようね」

小さな黒猫さん

お祭りの日はとても晴れていて、ジェニーは学校から帰ってきてても何度も何度も窓の外を見ていた。昨日の夜からお祭りのために着る仮装を用意していたし、枕元にお菓子を入れる袋だって置いて寝たんだ。それに、今日の学校では先生の話なんてちっとも聞いていなかった。金髪の巻き毛をいじりながら早く授業が終わらないか、そればかり考えていたから学校でも窓の外ばかり見ていて、先生に叱られていたね。

そうそう、ジェニーはハロウィンの仮装で黒猫になるんだ。先週パパがハロウィンのためにジェニーと一緒に作った衣装だね。黒猫の耳に、ふかふかの毛皮のマント。それにお尻につけたひよろひよろのしっぽ。これを着て頬にヒゲを描いたら、ジェニーは立派な黒猫だ。ぱっちりとした目のジェニーに、黒猫の恰好はよく似合っている。

「ジェニー、お友達と待ち合わせの時間より ずいぶん早いんじゃないの？」

ママが心配そうに言う。約束の時間まであと一時間以上あるのに、ジェニーは黒猫の衣装をすっかり身に着けてしまっているんだもの。

「いいの、一番に行って待ってるから」

ジェニーは明るい声でそう言う。まだ夕方になる少し前で明るいから子供をさらう悪い大人もいないし、一人でも大丈夫。それに、ジェニーは今夜だけかわいい女の子ではなく、怖い怖い黒猫なのだ。ジェニーはお菓子袋を持って、黒猫の耳としっぽを揺らしながら家を出て行った。

そうだ、ジェニーにとってハロウィンはとっても楽しみなお祭りなんだ。楽しい仮装をして、お菓子をたくさんもらって、その後は友達の家を集まってパーティーをする。りんご食い競争をしたり、目隠しあてっこをしたりカボチャのランタンに灯りをつけたり、そして少し夜遅くまで騒ぐことができるんだ。こんなに素晴らしいお祭りはないんじゃないかってジェニーは思っている。だから、ハロウィンをこの世界で誰よりも楽しみにしているのはジェニーなんだ。

ジェニーが友達と約束している場所に行ったら、もう既に何人かハロウィンの仮装をして集まっている子供たちがいた。ジェニーは一番に来た自信があったのに、もうみんな集まっているのが少し面白くなかった。だけど、これから始まるお祭りのことを考えたらわくわくしてどうしようもない。みんな仮装をしているから誰が誰だかわからないのが面白いんだ。

「ねえジョン、ジョンなんでしょ？」

ジェニーはあてずっぽうに尋ねた。

「違うよ、僕は狼男さ！」

狼男は怖そうなマスクをエヘンと揺らした。

「ボクはお化け」

シーツを被ったお化けがゆらゆらと答えた。

「アタシは怖い魔女！」

とんがり帽子に赤毛のかつらをつけて、とんがり鼻を生やしている魔女も答えた。

「それなら私は黒猫！」

ジェニーも負けずに答えた。なんて小さくて恐ろしい怪物たちなんだろう！

「それじゃあハロウィンをはじめよう！」

狼男が歩き出した。ジェニーも後をついていく。きっとハロウィンだからってみんなふざけているんだとジェニーは思っていた。あんなことを言っていたけれど、多分狼男はジョンで、そしてお化けはピートで魔女はパットだ。こんな風に誰が誰かわからないのも、ハロウィンの面白いところだ。

最初の家は、学校の保健の先生の家だった。みんな精一杯怖い声で叫んだ。ジェニーも力いっぱい怖い声を出して見せた。

「イタズラか！ お菓子か！」

するとすぐに扉が開いて、中から優しい保健の先生が出てきた。

「ようこそかわいいおチビちゃんたち。さあ 袋をお出し」

そして大きなチョコチップクッキーをくれたんだ。次の家では棒付きキャンディーをもらって、その次の家では大きなガムを三つも！ なんてハロウィンは素敵な日なんだろう！

そうやって家々を巡ってお菓子がたくさん集まった後は、ジョンの家でハロウィンパーティーをする約束になっていた。少し日が暮れてきて、玄関に飾ってあるカボチャのランタンに灯りを入れている家が増えた。ジェニーは暮れゆく街並みにわくわくしながら歩いてたけれど、みんなジョンの家とは反対の方向に歩いていくんだ。

「ねえ、ジョンの家に行くんじゃないの？」

不安になったジェニーが狼男に尋ねた。

「それよりもっと楽しいパーティーがあるんだ」

「誰の家？ パットの家？」

「違うよ、もっといいところさ」

みんながどんどん歩いていくから、ジェニーも後をついて行った。ピートの家もパットの家も通り過ぎてしまったから、誰か別の友達の家に行くんだろうとジェニーは思った。でも、すっかり街を出てしまってもみんな歩くのをやめないからジェニーは不安になってきた。その友達の家は遠いのだろうか？ 楽しいパーティーをやっていたとして、ちゃんと家に帰れるだろうか？ そして知らない子ばかりだったら、お友達になれるだろうか？ ジェニーはそんなことばかり考えていた。

それからジェニーたちはどのくらい歩いたのだろうか。一向はジェニーの知らない道を歩いていた。もう日はとっくに暮れている。だんだんジェニーは心細くなってきた。仲良しのジョンたちと一緒にだけれど、こんなに暗くなるまで子供だけで外にいたことがないからだ。

「もうやだ、私うちに帰る」

ついにジェニーが立ち止まった。歩いていた狼男たちが振り返ってジェニーを見つめる。

「おうち？ どこにあるんだい？」

お化けが不思議そうに尋ねた。

「ハロウィンだからってふざけるのはやめて！ おうちはおうちでしょ！」

ジェニーはバカにされていると思って、思い切り怒鳴った。せつかくのハロウィンがイヤな思い出で台無しになってしまう、そう思ったのだ。すると魔女がクスクスと笑いながら答えた。

「おうちって、なあに？」

ジェニーは後ろを振り返って、そして泣きそうになった。歩いてきた方に街はなく、道も消えていたからね。そしてお化けのような木がぐねぐねと生い茂り、コウモリがバサバサと飛び交っている。空を見上げれば、行く道を照らしていたのは見たこともない大きな大きな月だった。まるで絵本に出てくるお化けの国のようで、ジェニーは悪い夢を見ているような気分になってしまった。

「きみはハロウィンを誰よりも楽しみにしていたじゃないか」

狼男がジェニーの目の前にやってきて言う。そのマスクはどんなに引っ張っても、外すことができないようだ。

「だからハロウィンの国に連れてきたんだよ」

お化けが跳ねてシャツがめくれた。その下には何も見えなかった。

「ずっとハロウィンのお祭りが出来るんだよ」

魔女が笑って言うけれど、ジェニーは怖くてそれどころではなかった。この子たちはジョンでもピートでもパットでもなかった。みんな本当のお化けだったんだ。

「大丈夫、寂しいのは最初だけだから」

狼男がジェニーの手を握った。

「僕らみたいな子供ばかりだよ、きっと君は歓迎される」

お化けも後から続ける。

「嘘、嘘よ！ そんなのウソだわ！」

ジェニーは魔女が何かを言おうとする前に森に向かって走り出した。真っ直ぐ歩いてきたのだから、真っ直ぐ走っていればいつか戻れると、そう思ったのだ。ジェニーは暗い森の中をただひたすら真っ直ぐ進んだ。遠くで獣が低い声で鳴いているし、鳥がギャアギャア騒ぐ声も聞こえる。それにぐねぐねの木といたら、枝をお化けの手のように垂らしてこちらを見下ろしているときた。こんな怖い場所にはもういたくない。きっとこれは夢なんだ、目が覚めたらママがそばにいて、またおやすみのキスをしてくれるはずなんだ。ジェニーは走りながら夢が覚めることを望んだ。

「夢、覚めろ！ 夢、覚めろ！」

走りながら何度も何度も叫んだ。こんなことが現実であるわけがない。こんなお化けみたいな森に子供だけでやってこれるはずがない。これは夢に決まってるんだ.....。

「夢じゃないわ」

顔を上げると、魔女がいた。狼男もお化けもいる。ジェニーは気が動転して、どうにかなってしまいそうだった。あそこからたくさん走ってきたはずなのに、どうしてこの子たちがこんな場所にいるんだろう？

「さあ、一緒に行こう」

狼男が手を差し伸べる。ジェニーは息が切れて、足ががくがく震えてしまってその場に座り込んでしまった。

「いや、行かない！」

とうとうジェニーはしくしく泣き始めてしまった。

「困ったね、早く戻らないといけないのに」

「でも行きたくないって言っている」

「それじゃあ、ここで消えるしかないのかな」

ジェニーは三人組の話にびっくりして顔をあげた。

「ここは人間の世界とハロウィンの国の境目なんだ」

「もう人間の国へ戻れないけど、ハロウィンの国でもないの」

「夜が更けたら、この道も消えてしまうんだ」

三人組はジェニーに背を向けた。

「仕方ない、この子はここに置いていこう」

「かわいそうに、狼に食べられてしまうわ」

「早く戻ってみんなと遊ぼう」

ジェニーは本当に置いて行かれてしまうと思い、急いで立ち上がって三人組の後を追いかけた

。

「よかった、まだ歩けるね」

「ハロウィンの国までもう少しよ」

「毎日がハロウィンさ。お菓子もカボチャもたくさんあるよ」

それでもジェニーは、悲しい顔をしたままだった。

「おうちには、いつ帰れるの？」

しゃくりあげながら、ジェニーは尋ねた。

「そのうちいつか、さ」

「それまでいっぱい遊べるんだよ」

「おうちのことなんて忘れてさあ」

三人組は楽しそうにジェニーの周りを回った。

「ほら、はやく行こうよ」

「仲間がたくさん待っているよ」

「毎日遊んで、楽しく暮らすんだ」

涙を流しながら、ジェニーは三人組の後ろに着いた。頬に描いたヒゲは、どんなに濡れても落ちることがなくなっていた。

「最初は寂しいかもしれないけど、すぐ慣れるよ」

「面白いおもちゃがたくさんあるよ」

「僕らも君と早く一緒に遊びたいんだ」

話しているうちに、不気味な森は姿を消して明るい広場へやってきた。そこにはたくさんのカボチャとリンゴ、そしておいしそうなお菓子がたくさん積み上げられた木の箱がたくさんあって、怖そうな格好をした子供たちがたくさん遊びまわっていた。

確かに、ジェニーはこんな場所を望んでいた。そして毎日がハロウィンだったらいいのに、と思っていたはずだった。だけど、今はここで暮らすことなど考えていない。あんなにハロウィンを楽しみにしていたのに、今となっては怖くて心細くてたまらないんだ。全くおかしいことだね。

「ねえ、本当におうちに帰れないの？」

「言ったじゃないか、いつか帰れるって」

三人組が言うには、ハロウィンの国から戻るには、必ずハロウィンの夜でないといけないのだと言う。だから、少なくとも来年のハロウィンの夜までは帰れないのだそうだ。

「それに、家に帰るのは順番なのよ」

「それまで、めいっぱい遊ぶのさ」

魔女がジェニーに棒付きキャンディーを手渡した。宝石のようにキラキラ赤や緑に輝く飴玉も、ふわふわの雲みたいな綿菓子もクッションみたいに大きなケーキも、今のジェニーには興味のないものだった。

「今が楽しければ、それでいいじゃない」

「さあ、お菓子を一緒に食べよう」

三人組のほかに、たくさんの子供たちが集まってきて、ジェニーはすっかり囲まれてしまった。

「お菓子を食べて、いたずらしよう」

「ここには怒鳴る大人も怖い大人もいない」

「僕らがイチバン怖いんだ」

「さあ、はやく！ さあ、はやく！」

口々に子供たちがまくし立てる。ジェニーはまた怖くなって、キャンディーを口の中に入れてしまった。それはとっても甘くて、頬が落ちそうなほどおいしいんだ。ここにいるみんなが大好きな、とってもおいしいお菓子だ。これさえあれば、他に何もいらぬ。

「ようこそ、黒猫さん」

魔女がニヤリと笑った。また、楽しいパーティーが始まりそうだ。



すっかり夜が更けてから、郊外の住宅に一匹の黒猫が帰ってきた。

「あなたが出た後、ジョンたちが迎えに来たのよ。会わなかった？」

心配していたママが優しく迎えてくれた。

「ううん、会ってないよ。違う子たちとハロウィンパーティーに行っていたの」

すまなそうに答えて、もう一度ママにごめんなさいと言った。

「そう。あなたがいなくてみんな心配していたわ。明日謝りに行きなさい」

「はい、ママ」

家の中は暖かくて、マントを着ていても夜の風で冷え切った身体を優しく包んでくれる。

「それじゃ、おやすみなさい。私のかわいいジ……黒猫さんだったかしら」

ママが困ったような声を出す。そりゃそうだ。ここ最近、この困った黒猫さんはハロウインのことばかり考えていたんだからね。

「ううん、お祭りは終わったからもう黒猫じゃないよ」

「そうだったわね、おやすみジャック」

ママは優しくおやすみのキスをする。そうして僕は、やっと黒猫の仮装を脱ぐことが出来たんだ。

言っただろ？

ハロウインの国から帰れるのは順番だって。

ごめんね、ジェニー。

ひとりぼっちのトリック・オア・トリート

どのくらい歩いてきたのだろう。ただ真っ直ぐ歩いてきただけなのに、知らない場所にやってきたようだ。道の両脇には背の高い草が一面に生えていて、そこからオレンジ色に光る街灯が等間隔で並び立ち、星のない夜空をぼんやりと照らしていた。道は緩やかに登り坂になっていて、遠くの方でまた緩やかにカーブを描いている。一体ここはどこなのだろう。車も人も通らない、この場所にやってきたのはいつのことだったのか。そもそも、どうしてここまで歩いてきたのだろう。足は既に感覚を失くして、自動的に体を前へ進めるだけの棒になっていた。後ろを振り返ってもただ歩いてきた道がぼんやりと照らし出されているだけで、やってきた場所が見えない。

一体いつからこの場所にいたのだろうか。

覚えているのは、とても悲しいことがあったということだけだ。胸が張り裂けるような気持ちが続いて、泣くに泣けないほど悲しい気持ちだったような気がする。今ではその悲しみも何となく胸に残っている気がするが、何故悲しかったのか覚えていないので流す涙もなかった。ただ今はオレンジの光に導かれるまま、薄青の空を目指して真っ直ぐ歩くより他になかった。

時間の感覚を失くしているので、どのくらい歩いたのかもわからない。見えている景色はほぼ変わらず、ただ草原と街灯と、少しだけ曲がっている緩やかな上り坂があるだけだ。そのせいでほんの数十分しか経っていないような気もするが、幾日も経過している気もする。空を見上げて星はひとつもなく、どちらに向かっているのかも検討がつかない。

もしかしたら、ここは死後の世界なのではないだろうか。ふわふわと歩き続けているうちにそう思うようになった。現実の世界で、このような奇妙な場所は存在しない。それに、歩き続けても全く同じ景色ばかり続いていると言うのもおかしい。この場所はいつまでも夜の入り口で、夜も更けなければ朝も来ない。まるで時間が止まっているようだ。生き物の気配もなければ、風の音もしない。この街灯もどこの誰が付けているのかさっぱりわからない。

「ここは、どこなんだい？」

永く永く歩いた末に、誰に言うわけでもなく声を出した。誰かに会いたいと思っていたし、声に出せば誰かに届くと思ったからだ。例えそれが空しいことだとわかっているとしても、それでも声を出さずにはいられなかった。

「ここは、どこでもない場所さ」

声が返ってきた。温かいような、冷たいような、色を感じさせない声だった。

「君は、一体誰なんだい？」

既に心が凍っているのか、誰かの声を聴けた喜びも失くしたまま、また尋ねた。

「誰でもいいだろ、誰でもないんだから」

声は頭上から聞こえているようだった。しかし、相変わらず他の生き物の気配が感じられない。道のわきに生えている草だって息をしている様子はないし、ただ空気が漠然と広がっているだけだ。

「ここがどこで、あんたが誰とかもう無意味なんだ」

「だから、どこかに行こうと思えばどこにでも行ける」

「そのかわり、ここからは離れられないよ」

声があちこちから聞こえてきた。皆等しく無機質な響きで、心の感じられない声だ。

「つまり、あんたはもうどこにも行けないのさ」

声がだんだん遠くなり、道の輪郭がぼんやりと歪んできた。どこにも行けない、というのはどういうわけだろう。この道が永遠に続いているわけでもないだろう。いつか、どこかにたどり着けるはずだ。

「試してみるかい？」

ぼんやりと歪んでいた道がぱっくりとなくなり、オレンジ色の街灯も一斉に消えてしまった。辺りは完全な闇に包まれて、上下の感覚すらわからない。

「そこから逃げ出してみな、できるものならね」

声は冷たく響き、あっという間に全ての感覚が闇に飲み込まれた。



気が付くと、ボクは仮面をつけてランタンを持って立ちすくんでいた。そうだ、今日はハロウィンでこれからお菓子を貰いに歩き回るのか。周りの子供が楽しそうに走り回っている。ボクの他

に五人の子供がいて、それぞれ不思議なマスクやマントを身に着けていた。ボクは彼らの後についてお菓子をもらいに行く。

「お菓子をくれなければ、イタズラするぞ！」

ボクたちは大声で叫んだ。すると中からおばさんが出てきて、キャンディーをひとつずつ配り始めた。ところが、ボクの袋には入れてくれなかった。きっと何かの間違いだったのだろう。ボクらは次の家へ向かった。そこでもボクだけお菓子を貰えなかった。その次の家でも、またその次の家でも。

「ねえ、おかしいよ」

ボクは一緒にいる吸血鬼の恰好をした子供に声をかけた。だけど、彼もボクのことを無視するのだ。

「お前、何か言ったか？」

「いいや、気のせいじゃないか？」

吸血鬼とミイラ男は不思議そうにボクの前で話を続けた。

「ボクはここにいるよ！」

ボクは精一杯ランタンを揺らしてみせた。

「何だろう、変なの」

「本物のお化けだったりして」

ボクが立ち止まっても子供たちが立ち止まることはなく、お菓子袋のキャンディーを自慢しながら通りの向こうへ消えていってしまった。

「ボクは、ここにいるのに」

あちらの家では子供たちが大きなケーキをもらって、ほおぼりながら歩いている。こちらの家ではパーティーの飾りつけをしている。どこにも、ボクの居場所がない。誰も知らない街で、自分のこともわからないボクがどうすればいいのかなんて、誰も教えてくれなかった。

やがてそこかしこで響いていた子供たちの脅し文句も聞こえなくなり、冷たい夜がやってきた。ボクはランタンを持ったまま途方に暮れた。

「家に、帰らないと」

だけど、家なんてどこにあったか覚えていない。そもそも、ここがどこで、自分の名前だってよく思い出せていないのだ。潰されそうな不安を押しよけるようにボクは目いっぱい走って、いろんな家のベルをめちゃくちゃに鳴らした。どこの家でも玄関まで出てきてくれたけど、誰もボクに気付いてくれなかった。

「おかしいよ、こんなのって、ないよ」

ボクがめそめそと歩いている間に、パーティーも終わって家々の灯りまで消えてしまった。温かいベッドに入って眠ったら、どんなに気持ちいいだろうか。ボクは仮面を脱ぎ捨て、ランタンを地面に叩きつけた。すると急に眩暈がして、また暗い闇の中に落ちて行った。

明るい日射しがまぶたの向こうに感じられた。ひどくおかしな夢を見ていたような気がする。

「お兄ちゃん、朝だよ」

妹の声が聞こえる。鈴のようにさわやかなかわいらしい声だ。

「今日はお祭りでしょ、一緒に行く約束だよ」

そんな約束をしていたのかどうか、よく思い出せない。だけど、そんな気もする。

ところが、目を開けて仰天した。目の前にある妹の頭はかち割られ、中身がどろどろと溢れだしていたからだ。

「お兄ちゃん、痛い、痛いよ」

閉じられていない瞳がこちらを見ている。妹の身体はバラバラに散らばり、慌てて手足をかき集めるけれど触るそばから砂のようにこぼれて消えていく。その間も妹はずっと痛い痛い呻きつづけ、ついに頭だけになってしまった。既に皮膚の剥がれた顔を持ち上げると、妹は最期の言葉を告げた。

「お兄ちゃん、憎いでしょ」

「私をこんな風にした奴を探してね」

「私はそこで待っているから」

そうして、抱えていた頭部も砂になって消えてしまった。

「そうだ、ボクは復讐をしていたんだ」

消えてしまった妹の頭部を持っていた形のまま、呆然と手のひらを見つめていたボクは思い出した。妹の頭をかち割った連中を見つけて、同じように頭を割る。その感触を、ボクはよく覚えている。母さんの手伝いでカボチャを割ったときと同じだ。ナタを振り上げて、勢いよく振り下ろすとガチンという手ごたえがする。それが面白くて、いくつもいくつもカボチャを割っていた。人の頭なんて、カボチャと同じだ。いつの間にか妹の頭の代わりに、目の前にカボチャがたくさん転がっていた。ボクは握りしめていたナタを振り降ろし、ひとつずつカボチャを割っていく。

「お願い、助けて」

「中身を出さないで」

「ランタンにしないで」

カボチャが口々に喚く。そんなこと、知ったことではない。ボクが割りたいから、カボチャを割っているのだ。そして中身をくりぬいて、ハロウィンのお面を作ってやろう。穴を空けて、中にロウソクを灯してやろう。これは妹の復讐で、救済なんだ。きっと妹も喜んでくれる。そうやってボクはいくつもいくつもカボチャを割っていった。身と種にまみれて、たくさんのカボチャの悲鳴を聞いた。カボチャが何かを言うわけがない。これは幻聴だ、カボチャが喋るわけがない。もっとカボチャを割らなければ、割って割って中身を出してくりぬいて、穴を空けてまた割って……。そうして全てのカボチャの中身を出せば、妹のところに行ける。そんな気がしていた。

「違う、そこに私はいない」

妹の声が聞こえた気がした。いくつカボチャを割ったのだろう。何もない空間の、地平線の向

こうまで割れたカボチャが転がっている。ボクが顔をあげるとカボチャは全て消えて、代わりに妹のかち割られた頭がたくさん転がっていた。

「また、間違っただのか」

前にも同じようなことがあった気がする。だけど、それはもう思い出せなかった。ただ思い出せるのは胸に張り付いた悲しみだけだった。

「どこに行けばいい？」

ボクはナタを自分の頭に振り下ろした。そうすることでしか、ボクはどこにも行けないと思ったからだ。ところが、ボクの頭は光の塊のようにするりとナタを通してしまった。

「おかしいな、これでは死ねない」

ボクは何度もナタを頭に通した。するりするりとナタは頭をすり抜ける。腕や足を切りつけると、それはすっぱりと身体から離れた。ボクは首にナタを当てて思い切り力を入れた。すると身体から頭がふらりと離れて、ボクは光の玉になってしまった。

「そうだ、妹のところへ行こう」

光の玉はゆらゆらと宙をただよった。たくさんあった妹の頭やボクの身体は消えて、また何もない空間にやってきた。

「ボクは、妹のところに行きたいんだ」

すると光の玉は何度か瞬き、ボクを再び暗闇に押しやった。

少しの間のこと、またボクは闇から解放された。目を開けようとしたけれど、とても眩しくて何も見えなかった。どういうわけか身動きも出来ないし、誰かがボクの頭上で何かを話している。

「こんなにひどい魂は初めてだ」

誰かが憤慨している。

「だけど、どうすればいいものか」

「復讐のために死後の裁きを拒否するとは」

「それだけでなく、裁きから逃亡も企てた」

「無論、復讐は許されるものではない」

しばらくの沈黙の後、誰かはこう言った。

「それなら、復讐が出来ないという罰はどうだろう」

「それはいい、彼の者に預けよう」

するとボクの口は勝手に開いて、勝手なことを言う。

「やめろ、お前らの思い通りになってたまるか！」

そうか、ボクはそんなことを思っていたのか。

「裁きが下った。地獄よりも辛い道だ」

「最後の審判の日が過ぎても、救われることはないだろう」

するとボクの口を何者かが無理矢理こじ開け、やけに眩しい光の玉を押し込めようとする。ボクは必死に抵抗したけれど、無駄だった。ボクは光の玉を飲み込み、光の玉になってしまった。そ

して、一切の記憶と感覚を奪われて、あの永遠に続く道に捨てられたんだ。



「思い出したかい？ 自分が何者なのか」

気が付けば一切の闇も光も払われ、またあの永遠に続く道に戻ってきていた。

「ああ。名前はまだ思い出せないが、何故ここにいるのか思い出せたよ」

ボクがここにいるのは、どこにも行けないようにするためだった。ここは誰もボクに興味を持たず、いつまでもひとりぼっちにするための牢獄なのだ。

「すごいね、あんたも。あんたがここに来て俺は四百三十七回あんたに同じ夢を見せた。つまり、あんたは既にあの夢を何度も見ていた。ただ、あんたは全てを思い出せなかつただけさ」

ボクはそれを不思議と思わなかった。全てがどこかで見たことがあって、初めて見るようなものばかりだったからだ。

どうすればこの道ではない場所に帰ることが出来るのか。どうすれば名前を思い出せるのか。そして、どうすれば妹にもう一度会えるのか。胸に張り付いた悲しみを溶かす方法も出来れば知りたい。だけど、今は全てが望むだけ無駄だ。この空間からはどうしても逃れることが出来ない。

それでも、ボクは歩くことを止められなかった。どこまで行っても同じ道だけど、何度も何度も同じ景色を見ているうちに何かが変わるかもしれないと思うから。

「かわいそうに、まだ歩き続けるって言うのかい」

ボクはもう声に返事をしなかった。

「自分が何者かなんて覚えていないのに」

それでもボクは歩くことしかできない。希望を持つことも、何かが変わることを望むのも許されていないから。

「仕方ないな、これでも持って行きな」

ボクの手には、あの夢に見たランタンが握られていた。オレンジ色の淡い光が、ささやかにボクを温かく照らしてくれる。ボクは礼を告げようとしたけれど、声の気配はすっかり消えて、またボクはひとりぼっちになってしまった。でも、もう寂しくない。いつかどこかで誰かに会えるよう、ランタンの光が導いてくれる気がしていたから。

あとがき

まずは、お買い上げありがとうございます。この書籍は、毎年10月にハロウィン企画と称して書いてきた千字程度の掌編をまとめて大幅に加筆、修正したものです。世間ではポップに「トリック・オア・トリート！」と楽しげなお菓子の祭りを開いているのですが、そんな浮かれた気分を吹っ飛ばすような話を取り揃えました。実質ホラーというより苦々しいお話のほうが多い気がするの、きっと気のせいではありません。それでは各話ごとに一言ずつコメントします。

○誰にもなれなかった夜

2011年にハロウィンSSを作ろうということで書かれました。ここにある作品の中では一番古いものです。元々は一行小説か何かの企画で書いたもので、最初は「工業地帯を舞台にした何かを書きたい」という動機だったと思うのですが、気が付けばこんなものになっていました。工場あんまり関係なくなりましたね。何かに追われる恐怖を書きたいというところがメインです。

○役立たずの影

2012年に公開したものに大幅な加筆と修正をしました。公開当初のものは影人と神隠し要素がメインでしたが、気が付けば「僕」がひたすら気の毒な話になっていました。世界誕生5分前説ではないですが、昨日会った友人と今日会った友人は肉体は同質でも精神が同質とは限らないという考え方が好きで、それは人間が日々進歩しているからだとかポジティブに考えることもできるのですが反転させると一瞬一瞬で死んでいくものだと思うのです。

○首なし地蔵とあんころもち

2013年の作品です。西洋のお祭りを無理矢理和風にしてみた感じです。キャンディーやチョコレートじゃなくて、あんころもち。そして一応過ぎ越し祭りというか収穫祭のようなところもあるのでこういうものになっています。リメイクしてみて作品の内容のエグさに自分で今更面食らうと言ういやらしい作品です。あと、冒頭のわらべうたは完全なオリジナルですので調べてもそれらしいのは出てこないと思います。そう信じたいです。

○ちいさな黒猫さん

2014年に「短編小説の集い」の企画で書いた作品です。かわいらしいトリック・オア・トリートを書きたかったはずなのですが、結局こういうことになるのです。元の作品ではジェニーの一人称でしたが、今回は大幅に視点を変えたものになっているので割と愉快的な形に仕上がっていると思います。一応『役立たずの影』と対になる話ですが、直接の関係はありません。

○ひとりぼっちのトリック・オア・トリート

2015年、つまり今年書き下ろし作品です。ウィル・オー・ウィスプの伝承を下敷きにして、あとはほんの少しの理不尽と悪意を隠し味にしてあります。何とも気味の悪い作品になっ

てしまったのですが、奇妙な離人感を味わっていただけたら幸いと思います。

こうやって時系列に並べると、年々理不尽と悪意が増している感じがして壮観です。そして、このモチーフでしつこくここまで書いた自分がまるで嫌になってしまいます。

最後に、この本は物騒なことが書いてありますが厄除けとして活用して頂ければと思います。この本を手にとってくださった皆様にこの本の内容とは正反対の楽しいハロウィンが訪れるよう、ご多幸をお祈りいたします。

2015年秋 霧夢むう

ハロウィンホラー短編集 誰にもなれなかった夜

<http://p.booklog.jp/book/102105>

著者：霧夢むう

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mumumumine/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102105>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102105>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ